

市民の取り組み・熱意実る

内陸線存続決定!

秋田内陸線は地域住民の日常生活に欠くことのできない交通手段として、平成元年4月の全線開業から1500万人を越える利用者を選んできました。しかし、平成19年度の利用者は約44万人で、ピーク時の半分以下に減少しました。同時に経常損益も2億6000万円の赤字を計上し、県と沿線自治体による財政支援により運行している現状を改善する様々な取り組みが展開されました。

を始めました。また、5月22日、市長から利用可能職員に通勤利用を強力に要請したところ、6月からは継続者を含めて84名の職員が定期通勤を始めました。

内陸線利用者も

買い物が便利

12月1日から鷹巣駅を經由して栄地区の大型商業施設をルートに加え、た路線バスの運行が始まりました。停留所は「鷹巣駅前」、「銀座通り」、「いとく鷹巣ショッピングセンター前」、「マックスバリュ鷹巣店前」が便利です。秋田内陸線利用者もバスを乗り継いで、大型商業施設や鷹巣駅前商店街や銀座通り商店街でゆっくり買い物ができるようになりました。

1日の運行本数は、大型商業施設行きは平日7本(土・日・祝5本)、帰りの鷹巣駅経由は平日7本(土・日・祝6本)です。内陸線とバスを利用して出かけてはいかがでしょうか。

お問い合わせ 秋北バス 株

☎018614213536



内陸線とバスを乗り継いで、ゆっくり買い物を楽しむことができます

4月「知事との内陸線トーク」開催

鷹巣と阿仁合会場のほか列車内での意見交換では、存続を求める参加者に知事は「日常の足として必要がなければやめればいい」などと述べ、地元の利用者と利用を強く求めました。阿仁合会場の山村開発センターでは、住民団体が連名で知事へ存続の陳情をしました。

6月市職員が定期通勤始める

内陸線ダイヤは職員の勤務地がある最寄り駅によつては、利用しにくい状況がありました。積極的に利用拡大に結びつけることを目的に、職員の時差出勤を5月1日から試行

11月存続に「GO!」

寺田知事は北秋田、仙北2市の市長、議会、住民との話し合いを続けてきましたが、最後まで残っていた仙北市議会の総意を確認できたとして、「存続に最大限努力する」と表明しました。

9月秋田内陸地域公共交通連携協議会設立

北秋田市と仙北市は秋田内陸地域公共交通連携協議会を9月9日設立し、会長には岸部市長、副会長には石黒仙北市長を選出しました。両市地域住民の日常生活の確保や観光その他による地域間交流を促進するために、秋田内陸線やバス等の公共交通の活性化と再生を目指すものです。

10月県民乗車運動展開

沿線住民の乗車運動による利用者増加に加え、県民乗車運動を展開するために、秋田県知事と北秋田・仙北両市長の連名で、全県市町村長へ協力依頼をしました。

◆市民による支援活動◆

▼阿仁中田地区では、笑内駅と萱草駅舎内外、比立内地区は比立内駅舎、北秋田シルバー人材センターは大野台駅舎の塗装ボランティアを行っています。

▼最寄り駅の自治会をはじめ支援団体では駅舎の清掃や花壇の手入れ、冬期間の除雪作業、中村地区では線路脇の草刈りなどの活動を長年続けています。

▼阿仁地区と合川地区の自治会では乗車回数券の購入運動を展開しました。

▼秋田内陸線エリアネットワークは「内陸線の活用と地域活性化」をテーマに講演会を開催するなど、多くの地域住民や団体を

が存続支援の活動を展開しています。

▼鳥海山ろく線を運行する由利高原鉄道や支援する住民団体と秋田内陸線再生支援協議会は5月30日に由利本荘市矢島インフォメーションセンター、8月30日は阿仁山村開発センターで再生支援活動情報交換会を開催し、それぞれの支援活動や利用促進対策などについて意見交換を行いました。

▼「内陸線存続アピール」行進が8月25日、北秋田市と仙北市の住民や支援団体約330人が秋田駅前アゴラ広場に集結、秋田県庁まで行進して存続を訴えました。県庁では寺田知事や県議会各派の代表に存続の要請文を手渡しました。

内陸線への思い

米内沢高校1年生では地域の自然・歴史・文化について理解を深めるための学習に取り組んでいます。



その中で、私たちは地域の未来には内陸線の存続が必要であると考え、内陸線の存続について「課題探求」をすることにしました。

私たちは阿仁支所にある内陸線再生支援室に出向き、内陸線の歴史や現状、様々な取り組みによって徐々に乗客が増えてきていることなどを伺いました。

私たちも「かわいいくまやマタギの着ぐるみなどで内陸線をアピールする」「公共施設等を駅のそばにすることができないか」「行き違いの時間を短縮できないか」などのアイデアを提案しました。

内陸線が無くなってしまおうと通学に利用している私たち米高生だけでなく、地域のお年寄り等も本当に困ると思います。私たちもできるだけ内陸線を利用し、地域のため、内陸線の存続のために貢献したいです。

秋田県立米内沢高等学校

1年 笠井 大勢 澤田 翔平
中山 徹 原 由華



「なんとがしねばね」と在京の秋田県出身者ら130名が参加した「秋田内陸線のつどい」

東京でも存続をアピール

「なんとがしねばね」秋田内陸線のつどい

「なんとがしねばね」と秋田内陸線の存続を願う在京の県人会や支援者約130名が12月6日、都道府県会館ホール(東京都千代田区)で開催された、「秋田内陸線のつどい」に駆けつけました。

世話人を代表して橋本五郎さん(政治ジャーナリスト)が内陸線存続の支援に立ち上がった経緯と阿仁ふるさと文化センターで開催された「秋田内陸線シンポジウム」や「週末文化人まるごと列車」の運行等これまでの活動を報告しました。

シンポジウムでは、明石康さん(元国連事務次長)、竹村寧さん(秋田内「秋田のことを考え、たくさんの方のアイデアをだすことにより問題解決の可能性が出てくる」などと述べました。会場からは、「内陸線を必ず通る観光ルートの開発」「首都圏秋田県人が居住地区の小学校に働きかけ、各地区に村を作り、農業体験など四季の旅行を企画する」「観光案内が上手で歌のうまい車掌や運転士など名物人を置く」などの意見が出されました。この後、秋田内陸線利用促進東京宣言を採択しました。